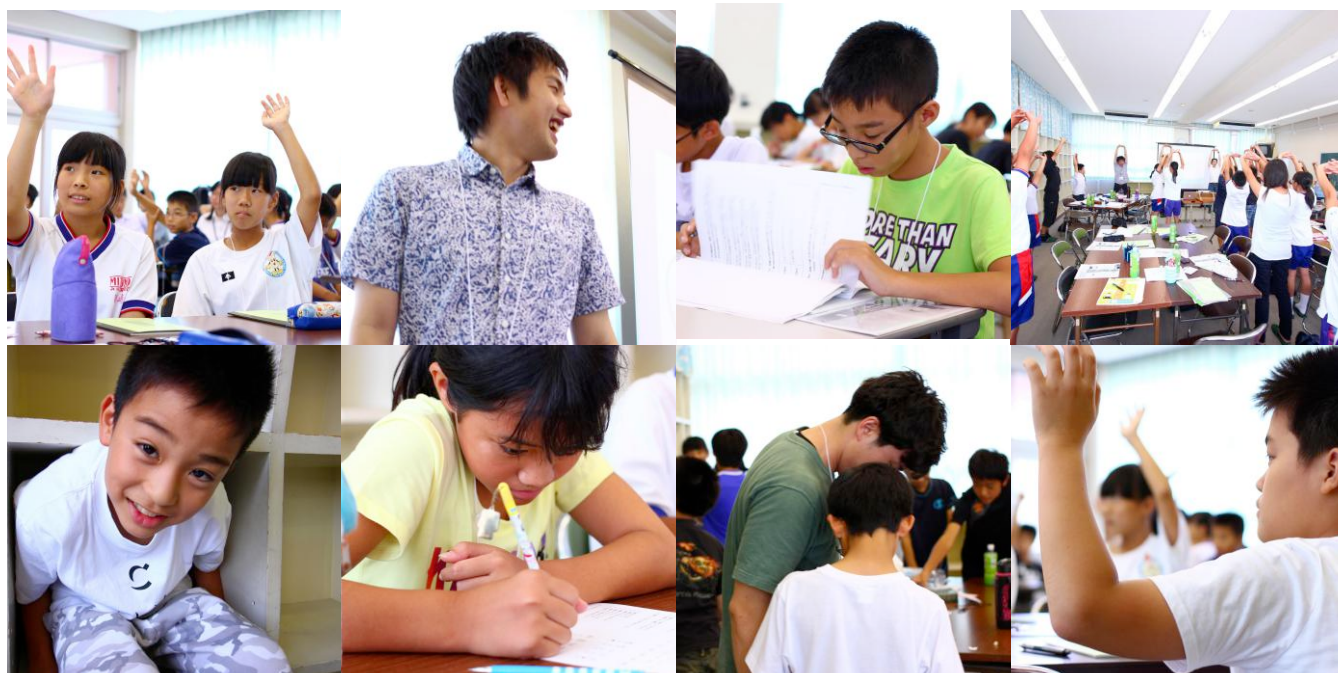


みとよ未来創造塾 2017年 実施報告書

2017年9月12日 みとよ未来創造塾



目次

| | |
|-------------------|----|
| 塾長挨拶 | 4 |
| みとよ未来創造塾の目的と背景 | 5 |
| サマースクールの目的 | 6 |
| サマースクールの開催概要 | 7 |
| 生徒へ伝えたい三つのメッセージ | 8 |
| サマースクールのカリキュラムと特徴 | 11 |
| 1日目詳細 | 14 |
| 2日目詳細 | 16 |
| 3日目詳細 | 18 |
| アンケートの結果 | 21 |
| 参加した中学生の声 | 25 |
| 大学生スタッフの感想 | 27 |



報告書サマリ

- ◎ みとよ未来創造塾が主催し、三豊市の中学生23名に対して、東京の大学生のスタッフが講師となり**国語力を向上させるサマースクール**「ホントニワカル国語」を実施した。
- ◎ サマースクールでは、「**学びに向かう姿勢**」を身につけることを何よりも重視し、「**採点演習**」という議論を促すための**メソッド**を用いた。
- ◎ また、視野を広げてもらうため、**東京の大学生のスタッフと気軽に交流**できる機会も数多く設けた。
- ◎ サマースクールは3日間に渡り行われた。**生徒6人の班に対して大学生が2名**ほどつき、一人一人と丁寧に言葉を交わした。1日目は小説問題、2日目は説明文問題と作文問題に取り組んだ。また、3日目は演習問題を解いた。すべての答案を大学生スタッフが採点、生徒にコメント付きで返却した。さらに、毎日大学生と交流できるコンテンツも設けた。
- ◎ 最終日には、文部科学大臣補佐官・東京大学教授の鈴木寛氏をお招きし、国語の重要性、読書の重要性についてご講演いただいた。
- ◎ 結果としては、**満足度は100%**であった。また、サマースクールを通して、全て（100%）の子どもが国語が好き・得意になった。さらに、国語をこのまま得意教科にしていきたいと回答した子どもは83%にもものぼった。一方、**読書が好きな生徒が13%増え**（事前61%、事後74%）、主観評価では95%もの子どもが、サマースクールによって読書を好きになった。
- ◎ 総括として、みとよ未来創造塾の**今回のサマースクールは、開催の目的を達成した**と考えられる。大学生と交流する中で、生徒は国語力以外にも多くのことを学んでいた。一方で、大学生スタッフもその生徒の姿をみながら多くのことを学びとった。全体として、**学び豊かで、楽しく、かつ、真剣な場をつくることのできた**のではないかと考えられる。

1. みとよ未来創造塾とは？

塾長挨拶

関係者の皆様のお力添えをもちまして、当サマースクールは予定通り2017年8月8日～10日に三豊市内の旧河内小学校において無事開催することができました。この様子は、8月9日付四国新聞に大きく取り上げられています¹。

今回は三豊市の中学校2校の1年生23名を対象としたもので、読書力、国語力をつけるための様々な講義を東京大学、慶應義塾大学等の大学生、大学院生が講師として行ったのですが、中学生たちの素直さ、吸収力には感動すら覚えました。1日目より2日目、2日目より3日目と、日を追うごとに子どもたちの読解力、文章力が目に見えて伸びていくのです。午前10時から午後5時までの講義、子どもたちは疲れたといって帰りながらも、翌朝、30分自転車を漕いで汗みずくになりながら目を輝かせてやってきてくれました。

子どもたちは、きっかけさえあれば本を読むし、本の面白さを見つけてくれるのだ、ということを確認できた3日間でもありました。

みとよ未来創造塾は「目指せ日本語復権 子どものための読書運動」（仮称）を推進しています。

これは、あらゆることの基礎は国語力（語彙力、読解力）にある。その衰退は国を衰退させる。国語力を身につける為の最良の方法は「読書」である、という観点から、小、中、高校生を対象に本を読んで貰おう、併せてこの運動の中心的役割を担う学校図書館も充実させようという運動です。

この運動には、文部科学大臣補佐官で東京、慶応両大学の教授でもある鈴木寛氏のご賛同を得、鈴木補佐官には運動の進め方について多くのご助言をいただいています。

今回のサマースクールを単発に終わらせず、三豊市における活動を継続的に積み重ねる中で国語力アップ、読書推進のノウハウを確立し、その実績を元に市から県へ、県から全国へ運動を広げることを視野に入れています。

最後になりましたが、三豊市をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

みとよ未来創造塾代表

白幡光明

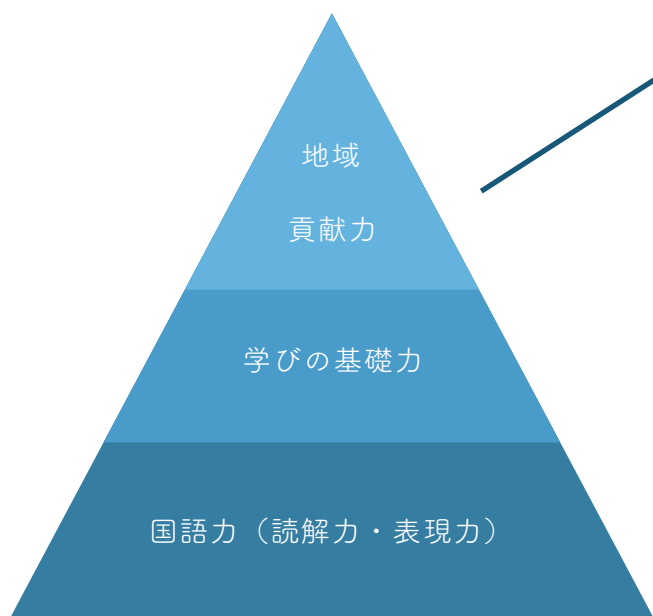
¹ 付録の記事コピーをご参照下さい。

1. みとよ未来創造塾とは？

みとよ未来創造塾の目的と背景

◎ みとよ未来創造塾の目的

- ▶ 少子高齢化が進む中でも地元で活気を生み出すには、子どもたちひとりひとりが学ぶことの楽しさに気づき、自らそれを実践することが何より大切です。私たちは「**自ら学び、地域貢献する人材を育成する**」という理念の下、みとよ未来創造塾として活動を始めました。



みとよ未来創造塾では、「地域貢献力」の土台として、「学びの基礎力」が重要であると考えています。また、「学びの基礎力」の根底には、国語力（読解力・表現力）があると考えています。

今回のサマースクール（ホントニワカル国語）では、一番の基礎となる「**国語力**」の養成にターゲットを絞りました。今後、みとよ未来創造塾では、以上3つの力を、有機的に関連させつつ育めるよう、地域に根付いた着実な教育活動を今後も展開していく予定です。

◎ みとよ未来創造塾開催の背景

- ▶ なぜ自ら学ぶ力を養う必要があるのでしょうか？
 - * これからの時代は、AI（人工知能）の導入と機械化が生活のあらゆる場面で進み、身の回りの環境が目まぐるしい速さで変化していくと言われています。また自然災害等の突発的な変化に遭遇してしまうかもしれません。このような、**予測できない未来を生きる**子どもたちには、変化に柔軟に対応し、自ら学び、考え、判断することが求められています。
- ▶ では、どうしたら自ら学ぶ力を養うことができるのでしょうか？
 - * 国語力（読解力・表現力）を伸ばすことによって、文章を読み解くことはもちろん、相手の考えを読み取り、自分の考えを伝えるスキルが上達します。「**わかった！**」という**成功体験を積み、友達との学び合いが活発になることによって**、学習意欲が向上し、自ら学ぶことにつながるのです。

1.みとよ未来創造塾とは？

サマースクールの目的

みとよ未来創造塾は、目的を達成するための第一歩として、今夏（2017年夏）に「ホントニワカル国語」サマースクールを実施しました。

● サマースクールの目的

- ▶ 香川県三豊市の中学生が**国語や読書に向き合う機会**をつくり、三豊市の将来を担う人材となるための**基礎力としての国語力を育む**こと。

● サマースクールの目標

- ▶ 学習方法がわかりづらい国語力を鍛えることで、全科目の**基礎力を醸成**する。
- ▶ 勉強の苦手な生徒たちのチャレンジを支援し、勉強に対する**自信を醸成**する。
- ▶ 少人数指導を行うことで、生徒ひとりひとりの**長所を伸ばし、弱点を補う**。
- ▶ 最適な読解力向上の方法の一つである**読書についての意義及び楽しさを伝える**。

● サマースクールの対象生徒

- ▶ 勉強しないといけないとは思っているものの、**学習方法がわからない**、もしくは**きっかけがない**ため、国語の勉強に身が入らない生徒。
- ▶ 勉強意欲があり、単語や文法等の基礎知識は習得したものの、**文章の読解に関してはどう学んでよいかわからない**生徒。

次章で、サマースクールの実施実績について説明します。



2.サマースクール実施概要

サマースクールの開催概要

| | |
|----------------|---|
| 企画名称 | ホントニワカル国語 |
| 開催日時 | 2017年8月8日（火）・9日（水）10:00~17:00 2017年8月10日（木）10:00~16:00 |
| 場所 | 旧・三豊市立河内小学校（廃校；現在は株式会社河内小学校が運営） 香川県三豊市山本町河内 714 |
| 生徒情報 | 学年：中学一年生 人数：合計23名 所属中学校：三豊市観音寺市学校組合立三豊中学校（19名） 三豊市立和光中学校（4名） |
| 主催 | みとよ未来創造塾 |
| 後援 | <ul style="list-style-type: none"> 三豊市教育委員会 公益財団法人大平正芳記念財団 |
| 協賛企業 （五十音順） | <ul style="list-style-type: none"> 公益財団法人大平正芳記念財団 カセイ物産株式会社 株式会社講談社 特定非営利活動法人四国NETT 新日本印刷株式会社 株式会社セイア 株式会社百十四銀行 特定非営利活動法人Bridge Asia Foundation 株式会社ボスコフードサービス |
| 協賛者 （五十音順） | <ul style="list-style-type: none"> 真鍋康正 吉岡龍示 |
| 会場協力 | <ul style="list-style-type: none"> 株式会社河内小学校 |
| 授業設計 報告書作成 | <ul style="list-style-type: none"> Schip (https://schip.me) |
| 企画協力 | <ul style="list-style-type: none"> 一般社団法人 Fora (https://fora.or.jp) |

2.サマースクール実施概要

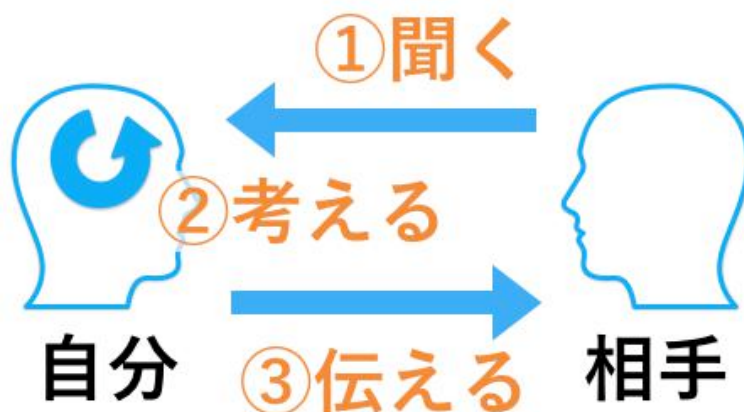
生徒へ伝えたい三つのメッセージ

サマースクールで伝えようとしたメッセージは、以下の三つです。

(1)「国語はコミュニケーションである。」

サマースクールを通じて、「**国語とはコミュニケーション力向上のための科目である**」というメッセージを中心に据えて授業を行いました。

ここで言う「コミュニケーション」とは、狭義のオーラル・コミュニケーションだけではなく、文字を媒介としたコミュニケーション（書物や文章の内容を読解する力、及び文章を書いて他者に自分の思いや考えを伝える力など）も含んだ、広義のコミュニケーションのことを指しています。²



このように設定した意図としては、以下の二点が挙げられます。

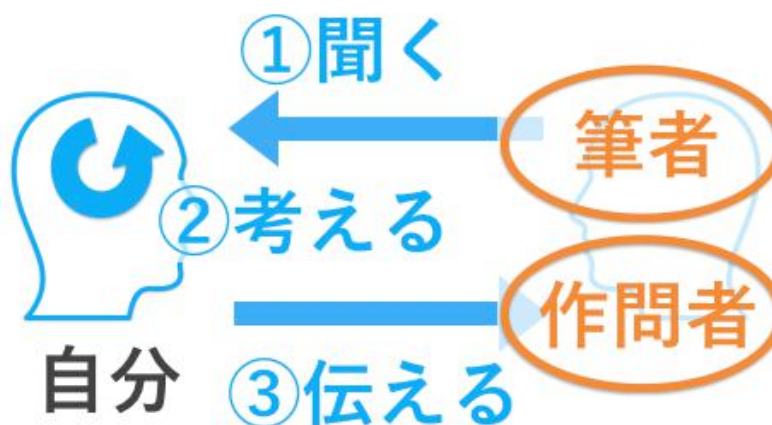
1. **日常生活の延長線上に国語という勉強を感じてもらう**ことで、サマースクールの内容を身近に感じてもらうこと。
2. あらゆる教科・学びにおいて言語能力が重要であることを理解してもらうこと。

² ここに示した図は、実際に生徒に提示したスライド資料である。こうした考え方の構図を示したスライドは、サマースクール中何度も提示し、確認しながら学習を進めた。

2.サマースクール実施概要

(2)「読解問題は、筆者と作問者（問題作成者）の二人とのコミュニケーションである。」

文章読解問題において妥当な解答を導き出すためには、問題文の筆者と作問者（問題作成者）の両者の言葉を理解した上で、理解した内容を適切に表現することが必要であるという考え方の下にカリキュラムを組みました。



問題文の筆者の言葉を理解するとは、いわゆる「問題文読解」を指しています。しかし、良い解答をするためには、それだけではなく、もう一人の重要な関与者である作問者（問題作成者）が何を問うているのかについても切り分けて理解することが必要です。

こうした姿勢がないまま読解問題に向き合うと、しばしば以下のような事態が起こります。

- ・ 問題文に書かれている内容を正しい論理で表現はしているが、設問の要求の範囲から外れている解答を書いてしまう。
- ・ 選択肢だけを見比べた結果、問題文と照らし合わせて正しいことを言っている選択肢が複数あり、選びきれない。

サマースクールでは、本格的な読解問題に向き合い始める中学一年生に、上記の最も基礎的な考え方の構図を、汎用性を失わない程度に抽象的に、しかし難解ではないように伝えたいと考えました。

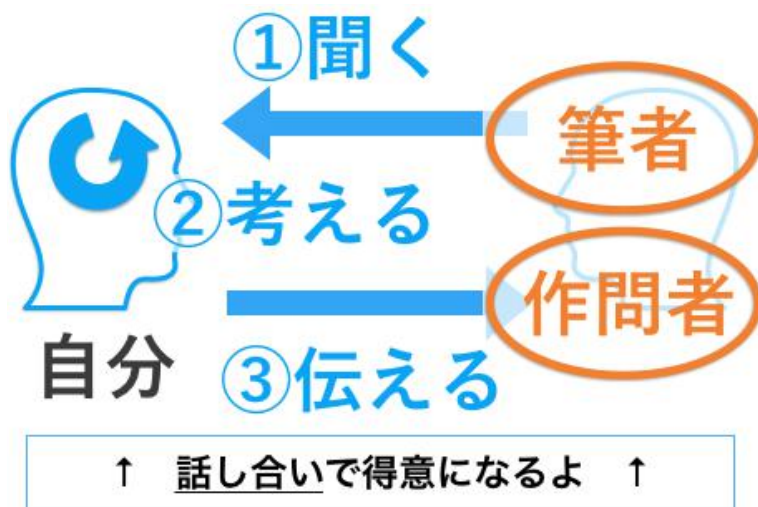
2.サマースクール実施概要

(3)「国語は話し合いで上手になる。」

自らの力で学びを進めていくためには、まず問いを発見し、つぎにそれについて議論し、さらに答えを追い求め、その中で新たな問いを発見していく、というサイクルを回すことが最も重要です。

そうした考えから、サマースクールでは、話し合い（議論と質問）が重要な学びのやり方だという点を強調しました。「聞く・考える・伝える」という一連のコミュニケーションを繰り返すことができるのが、まさに話し合い（議論と質問）だからです。

読解問題演習においても、与えられた解答を鵜呑みにするのではなく、それを一度疑って、自分たちの中で正解を検討する過程を重視しました。また、自分の作成した答案も、他者との話し合いのなかで異なった視点から見直すことができ、さらに答案を磨くことができる点も同時に強調しました。



このような基本的な学びの姿勢を体得してもらうことが、日々の学びに活かされることを願っています。



2.サマースクール実施概要

サマースクールのカリキュラムと特徴

(1) カリキュラム

| | 10:00 | 13:00 | 17:00 |
|------|---|--|---|
| DAY1 | イントロダクション 1. 楽しいゲームを通じて、お互いを知り合おう！ 2. 国語の基礎基本をおさえて、3日間のサマースクールの準備をしよう！ | 採点演習 小説編 1. 小説問題を通じて採点演習を体験しよう！ 2. 作者や作問者の言葉を「聞く」ための方法を身に着けよう！ | 大学生トーク 1. 自分の班の大学生以外と話してみよう！ 2. まずは、好きなテーマのところに行って話しをきいてみよう！ |
| DAY2 | 採点演習 説明文編 1. 説明文問題で、応用的な議論をしよう！ 2. 読解に使えるテクニックを身に着けて「考える」力をつけよう！ | 採点演習 作文編 1. 作文問題を通じて、発展的な議論をしよう！ 2. つなぎ言葉などを使いこなして「伝える」を身に着けよう！ | 読書ワークショップ 1. 読書について、好きな大学生と語ろう！ 2. どうやって好きな本に出逢う？読書の楽しさって？ |
| DAY3 | 問題演習 1. 3日間で学んだことを実践してみよう！ 2. 自分の力だけで、入試問題を解いて、苦手と得意を振りかえろう！ | 質問ワークショップ 1. 大学生に聞きたいことを質問してみよう！ 2. 3日間で身につけた言葉の力で、聞きたいことを言葉にしてみよう！ | すずかん先生講演会 1. 鈴木寛（文部科学大臣補佐官）の講演会を「聞いて」「考えて」みよう！ 2. できたら聞きたいことを「伝えて」みよう！ |

■ **国語の演習パート**：独自メソッドである「**採点演習**」を用いて、読解力・表現力を実践的に醸成していくとともに、国語に対する基本的な姿勢を身につけていく。

■ **大学生との対話パート**：大学生と対話することで、国語に限らず、より**広い文脈で学びや人生について考えていく**。

2.サマースクール実施概要

(2)「採点演習」メソッドについて

「採点演習」とは、演習問題に対して、自分ひとりで問題を解くに留まらず、生徒が議論しながら自ら答えに至るためのメソッドです。大まかに以下の流れに沿って進めます。

まず自分で解く 問題文と設問を読み、解答する。

採点演習 解答した設問の解答例を生徒が1～3点で採点する。

採点結果の共有と議論 採点結果を共有し、同じ点・違う点を議論する

評価基準の作成 よい解答の特徴を議論し、解答の評価基準を決定する。

自己解答の評価と再作成 採点基準に照らして答案を見直し、つくりなおす。

振り返り 自分のつくった解答を元に、自分の解答プロセスの反省をする。

最大の特徴は、解答した後、すぐには模範解答を提示されることも、自分の解答を採点することもせず、**まずは事前に用意した解答例の採点から始める**という点です。ここで言う解答例とは、講師側が用意した解答例のことを指します。受験問題の場合ならば、出版社や予備校の作成した模範解答例を用いることができます。また、選択肢問題を記述問題として提示し、元々選択肢であった文章を「解答例」として提示することも可能です。

このメソッドの特長は以下の二点です。

1. 解答例の採点結果により、**自然と議論が誘発**される。

1.1. 友達がどう採点したかが生徒の関心を引くため、採点結果が議論の題材となり、議論が自然と誘発される。

2. サマースクール実施概要

1.2. 例えば、採点結果がバラバラである場合は、3点満点をつけたAさんが1点をつけたBさんに「どこが減点ポイントなのか」という質問をすることができる。

1.3. 逆に、採点結果が同じだった場合にも、その解答に対する認識はある程度揃っているので「この答案のどこがダメだったのか？」のような質問がしやすい。

2. **批判的思考**が身につく。

2.1. 他者の書いた解答を一旦疑ってみることが自然と行える。

2.2. 批判的思考を行う相手が目の前の相手ではなく、見えない相手であるので、批判的姿勢を取る心理的障壁も高くない。

採点演習は、Schipが独自開発したメソッドです。元来は、東京大学の現代文の入試問題について議論するために開発されました³。しかし、本サマースクールで行ったように、問題や解答例のレベルを調整したり、解答や議論への講師の関与度を調整することによって、幅広い生徒に対応することが可能です。

(3) 大学生との対話について

大学生との対話機会を毎日のコンテンツとした目的としては、以下の点が挙げられます。

1. **人生について考える：**

国語という文脈にとらわれず、より広い文脈で**学びや人生について考えるための材料**を得ることが重要であると考えました。特に地方では、多様な学び方や生き方との接点が少ないため、三豊市の中学生に貴重な体験を提供したいと考えました。

2. **国語を学ぶ意義を考える：**

国語を勉強する意義の一つとして「読書」を身近に感じてもらおうと考えました。また、対話は採点演習で培ったコミュニケーションスキルの実践の場でもあります。

3. **関係性をつくる：**

本サマースクール終了後のフォローアップ、及び今後のみとよ未来創造塾の活動による香川県の中高生への支援のため、生徒との関係性を構築することを意識しました。

³ 東京大学の学生が運営しているオンラインメディアUmeeTにて、東大現代文を素材にした採点演習を幾度か行っている。興味のある方は、ぜひご覧ください。（Googleで「東大現代文」と検索すると1ページ目に出きます）

(1) 【東大現代文】某予備校の得点は58点？模範解答って本当に正解？【東大現代文解答コンテスト】 | UmeeT <http://today-umeet.com/article/21122/>

(2) 2017年5月14日 現代文ワークショップ第一回 | Schip 解くから問うへ <https://schip.me/news/2017-05-14-workshop>

2.サマースクール実施概要

1日目詳細

アイスブレイク

まずは自己紹介から始め、声を出して緊張をほぐした。続いて、本サマースクールを通じて重要な姿勢である、＜失敗を恐れない＞と＜話し合って協働する＞を体感してもらうため、「失敗ゲーム」と「新聞紙タワー」の二つのゲームを行った。

「失敗ゲーム」は、二人組で失敗談を共有し、大きな失敗をした人の後ろに小さな失敗をした人が付いて列車を作っていくというゲームである。「新聞紙タワー」は、班ごとに新聞紙3枚を用い、できるだけ高い構造物を作るというゲームである。ゲームの後の教室には、少しずつ楽しい雰囲気が広がりはじめた。



国語概論

次に、サマースクールに取り組むための基本的な姿勢を伝えた。伝えたのは、先に説明した「国語はコミュニケーションである」「読解問題は、筆者と作問者（問題作成者）の二人とのコミュニケーションである」「国語は話し合いで上手になる」の三つである。

スライドを用いて、細かく声に出して復習することを重視し、座学ではあるが子ども達が活動的に学べるように工夫した。



2.サマースクール実施概要

採点演習（小説問題篇）

お昼休憩を挟んで、最初の採点演習を行った。まずは、語彙の認識を合わせるためにくわからない単語出しゲーム＞から始める。ただ語彙の確認をするのではなく、くたくさんわからないことを見つけて、いっぱい質問しよう＞というメッセージを伝えるために、「一番多くわからない単語を挙げた人が勝ち」というゲーム形式で行った。

その後は、丁寧にゆっくりと採点演習の流れを説明しながら、生徒同士で話し合いながら読解を進めていった。解答例を生徒が採点する箇所は「先生になってみよう」、採点基準の作成の箇所は「作戦会議をしよう」などと、取り組みやすくわかりやすい名称で呼ぶよう工夫した。



大学生トーク

国語という教科の文脈にとらわれず、大学生と自由に話す時間である。4つのテーマと大学生スタッフの担当を提示し、どの話を聞きに行きたいか自由を選べる形式にした。

テーマは「将来のコト」「勉強のコト」「高校・中学のコト」「青春のコト」である。例えば「将来のコト」では、将来ゲームクリエイターになりたいという生徒に対して、大学生が経験を交えて真剣にキャリアのアドバイスをを行った。また「高校のコト」では、香川県に存在しない男子校の実態についての話が関心を集めた。

ふりかえり&まとめ

初日ということで当初緊張はあったものの、徐々に教室は朗らかで賑やかな雰囲気になった。普段と異なる頭の使い方を行ない、内容も盛りだくさんであったため、生徒からは口々に「疲れた～！」という声が聞かれた。



2.サマースクール実施概要

2日目詳細

復習

初めにまず1日目の復習をした。全ての生徒が1日目の内容を頭に入れており、「大事なことは何でしたか？」と質問すると、**ほとんどの生徒が手を上げて答えようとしていた**。1日目の緊張もほぐれ、活発な雰囲気の中、2日目が始まった。



採点演習（説明問題篇）

午前中は、実際に高校入試問題で出題された**説明文を用いた演習**を行った。1日目と同じようにわからない単語を洗い出してから、誤答を混ぜて用意した解答例群を用いて採点演習を行った。その過程で、よい答案の特徴とはなにか、答案には何を書けばいいのかを友人と議論した。最後にそれらを踏まえた上でもう一度答案を書いた。



作文演習

作文の演習を行った。＜主張＞＜理由＞＜具体例＞の三つの「文章構成カード」と、「接続語カード」を並べ替えることで、**視覚的に文章構成を意識することができる**ように工夫した。長い文章を書く訓練ではあったが、多くの生徒が要点をきちんと押さえた素晴らしい作文を書いていた。



2.サマースクール実施概要

大学生のオススの一冊紹介

大学生が読んで面白かった本の概要を1分間で紹介したあとに、その中から興味がある本を選び、さらに詳しい話を聞きに行くというワークを実施した。

哲学の本や最新の科学の本、名文を紹介した本や小説などを紹介した。中学生には少し難しいものもあるかもしれないと思っていたが、中学生は大学生の話に聞き入っていた。なかには**もっとオススの本を知りたいという生徒や、すぐに買って読みたいという生徒**もいた。

協賛企業の講談社提供の『青い鳥文庫』を各二冊生徒に配った。早速読み始める生徒もあり、大学生による本の紹介は中学生の読書欲を亢進させたように思う。

また、読書への興味をさらに高めるために、大野敬太郎氏(衆議院議員)、鈴木寛氏(東京大学及び慶応義塾大学教授)、八尾健氏(香川高等専門学校校長)、横山忠始氏(三豊市市長)が中学1年生に推薦する本をブックリストとして配布した。



ふりかえり&まとめ

2日目ということもあって、**大学生と中学生の距離も近く**なっており、和気藹々とした雰囲気の中で勉強することができた。説明文の読解では、多くの生徒が解答すべき点をきちんと踏まえた答案を作成していたし、作文演習でも長い文章を読み手にうまく伝わるような文章構成で自分の意見を書くことができるようになった。作文が苦手だという生徒が多かったが、書き方がわかってきたという声が多く聞こえた。

また、大学生との会話も強い印象を残したようだ。大学生による読書案内のみならず、昼食時間などでの会話も楽しんでいた。**ワークの合間には休憩も兼ねて、ダンスサークルに所属していた大学生スタッフの指導のもとで少しダンスを踊った**が、「ダンスが楽しかった」という意見も多かった。

勉強のためのワークはもちろんだが、普段接することのないであろう大学生との交流は中学生にとってはとても印象に残るものであった。



2.サマースクール実施概要

3日目詳細

復習



これまでの2日間の復習から、3日目が始まった。文章の読み方については全ての生徒が理解していた。文章の書き方については、2日目には恥じらっていた生徒も手を挙げて質問に答えようとしていた。3日目で少し疲れているかとも思ったが、**2日目以上に活発な雰囲気**で始めることができた。

実践演習

日本の中学入試でも最難関と呼ばれる筑波大学附属駒場中学の入試問題を用いて演習を行った。1日目と2日目で学んだことをいかして、問題を自力で解いてもらった。その後に簡単な解説を行ない、問題を振り返った。

難易度の高い問題だったが、**基本的な問題はほとんどの生徒ができていた**。また、応用的な問題に関しても数人の生徒が素晴らしい解答を作っていた。大学生スタッフも驚くレベルで、高い質の解答もいくつかあった。



個人面談

1日目から3日目を通じて大学生が感じたことを生徒一人一人に伝える個別面談を行なった。

面談では、**個々の生徒に、強みと弱みのフィードバックをし、今後気をつけていきたいポイントを伝えながら、3日間をふりかえった**。面談では、サマースクールの楽しかった点を生徒から聞くことができ、大学生としても学び多い機会となった。



2.サマースクール実施概要

質問ワークショップ

これまで大学生との対話時間は、運営側の用意したコンテンツに沿って行われていた。しかし、最終日は、**生徒が自主的に大学生との議題を考える**というワークを行なった。これは、3日間で身につけた**「問う力」を国語の問題以外で実践してみよう**という意図があった。ワークショップでは、中学生活のことから勉強法、大学生の生活など様々な質問がなされた。

3日間を通じて大学生と中学生の仲は相当深まっており、真剣な話から面白い話まで様々な会話がなされた。実質的に大学生が行う最後のワークであったが、最後まで楽しく活発な交流ができた。



鈴木寛教授の講演会

その後、鈴木寛氏（文部科学大臣補佐官、東京大学・慶應義塾大学教授）による、講演会を行った。

講演会では、生徒に問いかけながら教育の仕組みを教え、その後、**これから教育をどのように変えていけばよいかを議論**した。例えば、「教科書」について、重いので軽くしてほしいという意見から、自学自習しやすいように解答解説を充実してほしいという意見までが出て、活発な議論がなされた。生徒たちは講演を通じて、普段は聞くことのできない話を真剣に聞くことで視野が広まると共に、**たとえ目上の大人であっても質問をできる国語力がついた**ことを実感した。



2.サマースクール実施概要

閉会式

最後に、閉会式をおこなった。まず、お世話になった方へ3日間の学びをふりかえってお礼の手紙を書いた。まだ会ったことのない人へ手紙を書くということ自体が、**3日間で身につけた「考えて伝える力」の向上を実感**するものとなった。次に、大学生スタッフから一人一言ずつメッセージを伝えた。3日間、生徒の成長を看取り、学びに向かう姿勢がついたからこそその期待の言葉が生徒に届けられた。最後に、塾長からの挨拶をいただき、閉会となった。

サマースクールでは、中学生は大学生との交流を通じて、非常に刺激を受けたようであった。サマースクールに対する満足度も高く、国語が好きになったという声も多く聞かれた。**サマースクールが終了した後も、しばらく教室に残って写真を撮り合ったり、聞きたいことを聞いたり、冗談を言い合って楽しんだり、別れを惜しんだ。**

国語の勉強はもちろんのこと、生徒にとって大学生の存在が1つのモデルとなってくれたら幸いである。参加した生徒はみな中学1年生で、まだ中学生生活はじまったばかりである。だからこそ、サマースクールで学びの姿勢を身に着け、今後の生活にもいかされるのであればサマースクールを行った意義があると考えている。



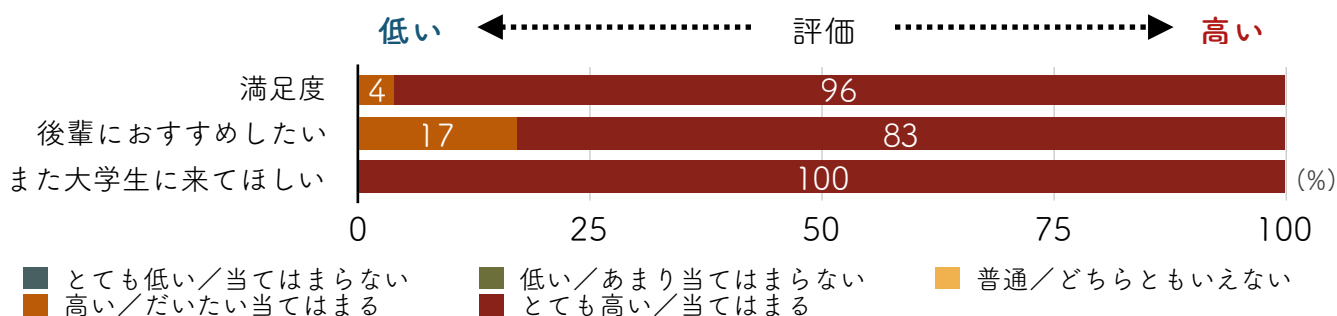
3.全体総括・まとめ

アンケートの結果

本サマースクールでは、最終日、すべてのプログラムが終了したあとに、参加生徒にアンケートを記入していただきました。アンケートの項目は、選択式と記述式からなり、参加生徒すべてからアンケートの回答を得ることができました（N=23）。

(1) サマースクールへの評価

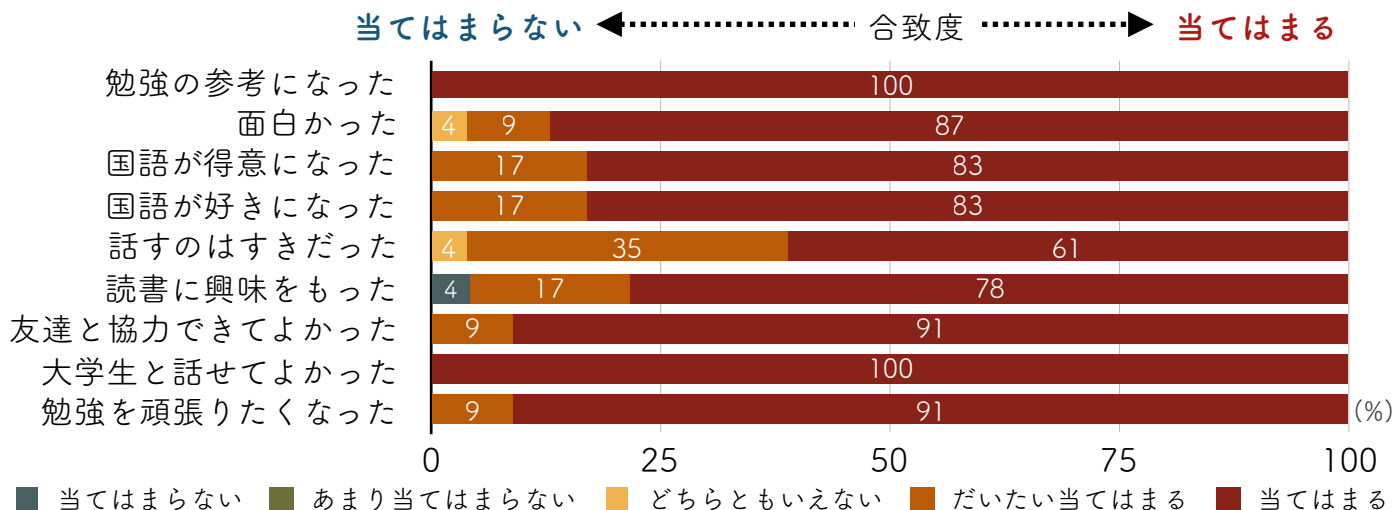
サマースクールへ高い評価をいただきました（96%が最高満足度）。



満足度のほか、真の満足度ともいわれる「ロイヤルティ（他者に進める度合い）」「リピード度（再度、体験したい度合い）」も尋ねましたが、いずれも高評価となりました。

(2) 授業内容への評価

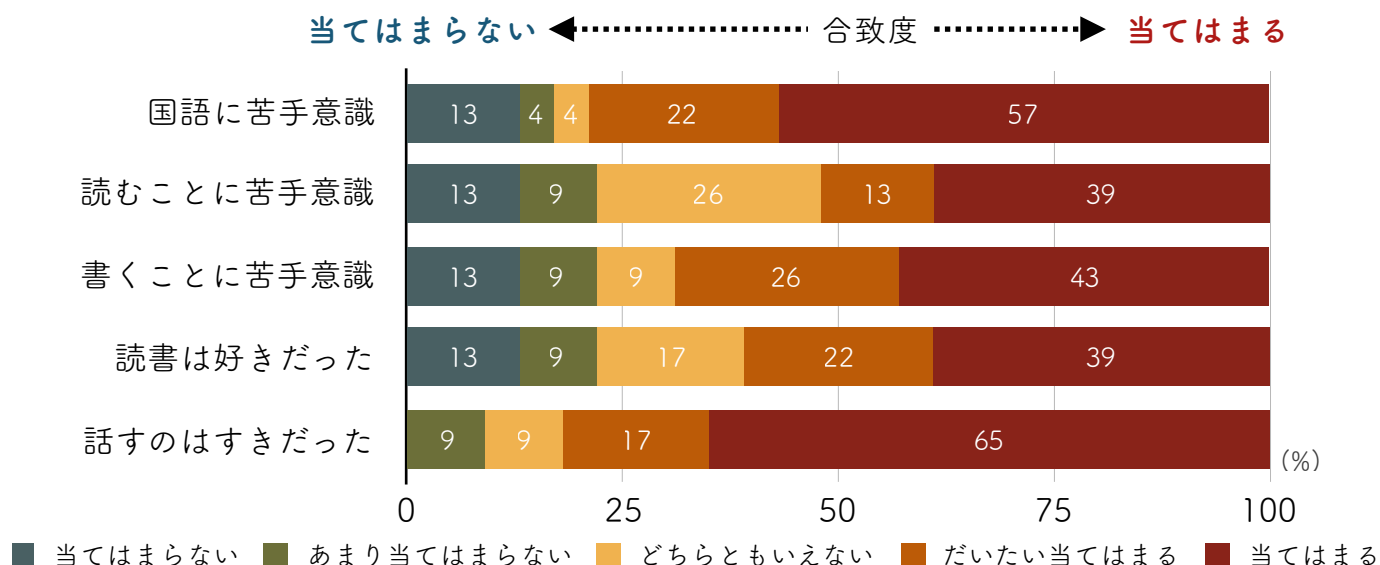
授業内容には、学びの側面、楽しさの側面ともに高評価をいただきました。



3.全体総括・まとめ

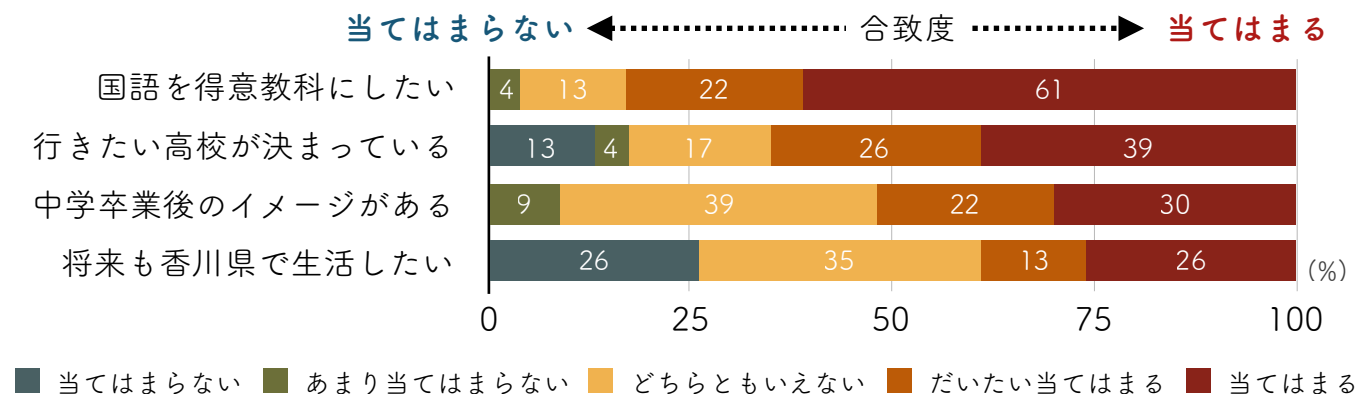
(3) サマースクール前の状況

サマースクール前は国語への苦手意識のある生徒が多く見受けられました。
一方で、好きか嫌いかでいうと好きな生徒が多くいました。



(4) サマースクール後について

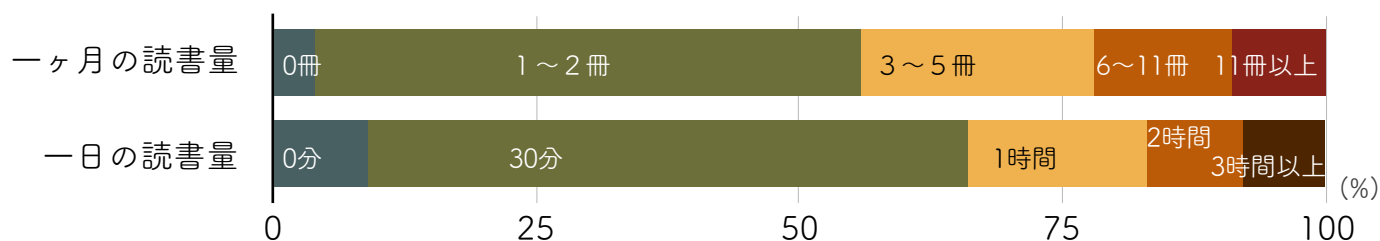
将来についても、前向きな回答が多く見受けられました。
国語については、得意になっていきたいという子が多数をしめました。
進路については、現時点で漠然とでもイメージができています。
香川県で暮らし続けるかについては、やや肯定的な意見が多かったです。



3.全体総括・まとめ

(5) 読書量について

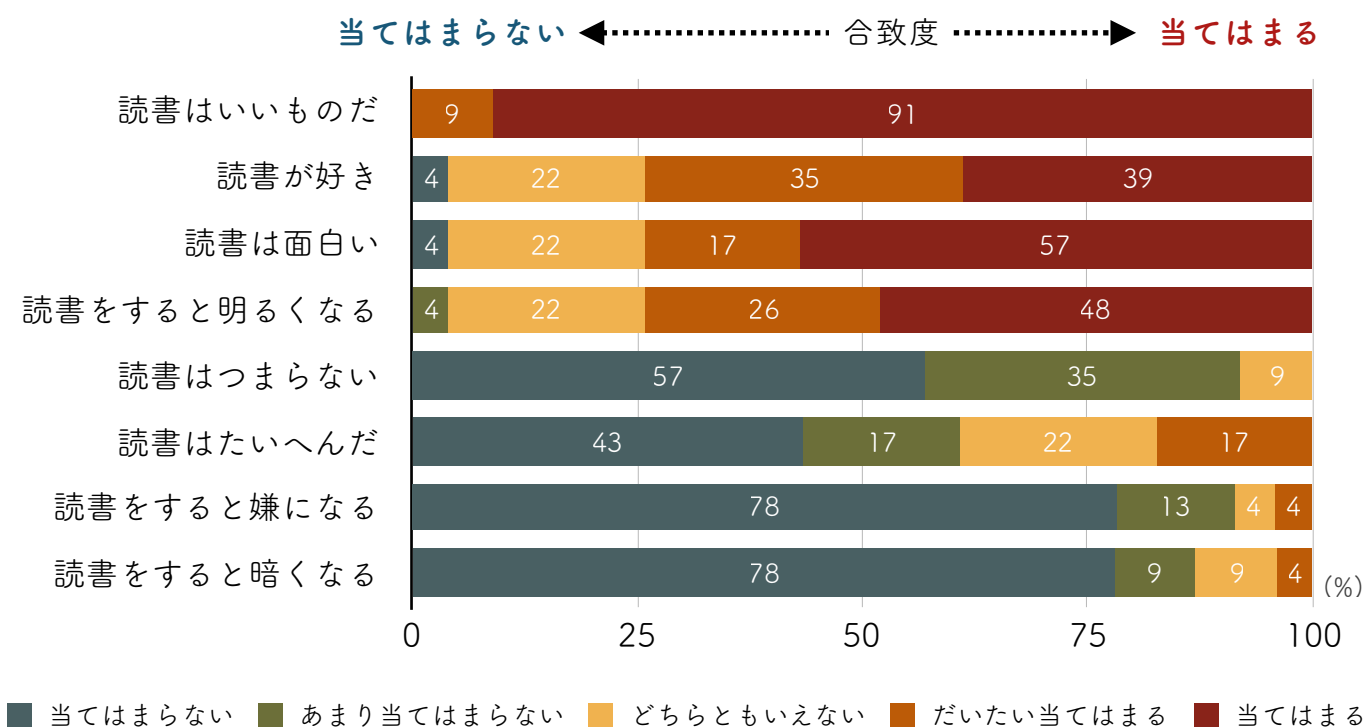
参加した中学生は、ふだんから読書に取り組んでいました。



(注) アンケート項目の(5)～(7)で集計した読書についての質問項目は、下記論文に依拠して作成した質問項目である。【秋田喜代美&無藤隆『読書に対する概念の発達の検討』教育心理学研究、1993 6月 30;41(4):462-9】

(6) 読書について

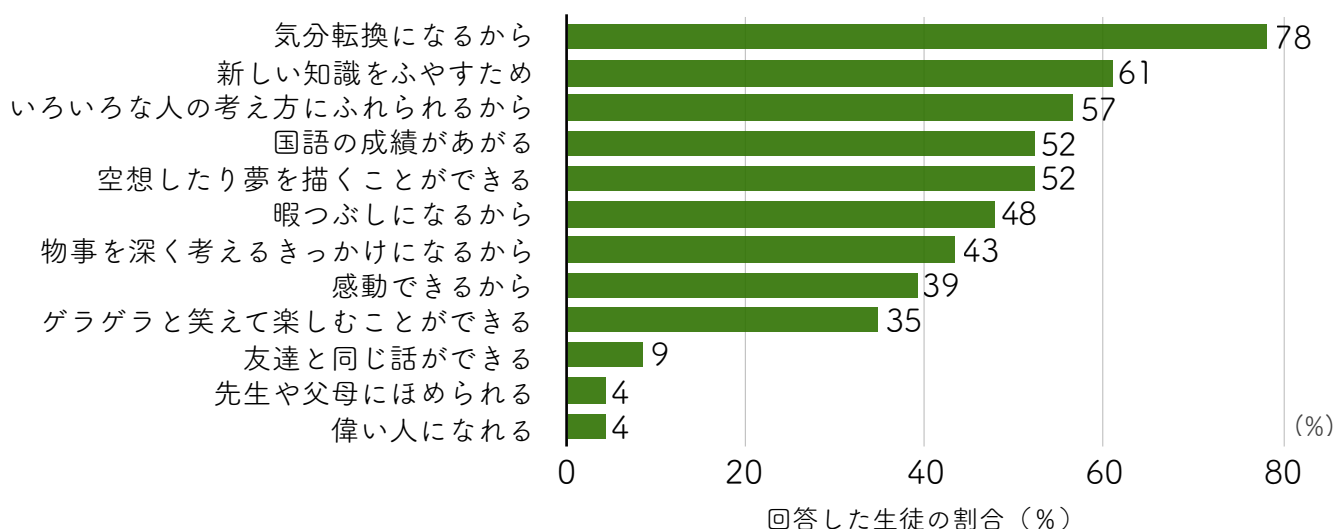
サマースクール後、生徒たちは読書についてポジティブにとらえるようになりました。



3.全体総括・まとめ

(7) 読書の目的

読書をする目的として「気分転換」のほかに「新しい知識をふやす」「いろいろな人の考えにふれる」といった知的好奇心に関連のある回答が目立ちます。



(8) 全体のまとめ

◎ 国語が好きになった／得意になった

- ▶ 事前には、国語が苦手だった子どもが78%だったにも関わらず、全て（100%）の子どもが国語が好き・得意になりました。国語をこのまま得意教科にしていきたいと回答してくれた子どもも83%にものぼり、3日間を通じて知識・技能のみならず、態度の面でも成長が見られたことが示唆されます。

◎ 読書が好きになった

- ▶ 事前には、読書が好きだった子どもは61%だったにも関わらず、事後では74%まで増加しています。また、子どもたちの主観評定では95%もの子どもが、サマースクールによって読書が好きになったことが分かります。

◎ 子どもたちの傾向

- ▶ 子どもたちは、国語や読書に対して主観的には苦手意識をもっているものの、実際には少しコツを会得するだけで得意になり、また好きになることができます。それゆえ、潜在能力（ポテンシャル）が開花する機会がありさえすればもっともっと伸びていくことができるはずです。その意味で、このサマースクールが子どもたちの主体性を引き出すきっかけの場となったのであれば、それが最大の成果だったと考えられます。

3.全体総括・まとめ

参加した中学生の声

(1) 学習面

- ・当日は、国語とは「聞く、考える、伝えるという三つのプロセスをもったコミュニケーション」であるということ、特に国語の読解においては筆者と作問者とのコミュニケーション（筆者は何を伝えようとしているか、作問者はどのような解答を要求しているかなど）が大事だという点を強調しましたが、その点について印象に残っている生徒が多くいました。
- ・サマースクールを通して「今までよりも国語のことがよくわかるようになった」という声や「国語力が上がったように思う」「国語が苦手だったけれど今回のサマースクールで好きになった」という声も多くありました。また「今回学んだことを日頃の勉強にも使いたい」という声もありました。国語の楽しさや問題に向かう姿勢を伝えられたという点で、以上のような感想をいただけたのは大きな喜びです。
- ・また、解答を作ったら友達と議論してみようということも強調して伝えましたが、「わからないことがあったら質問をすることが大事だとわかった」や「友達と話すことが大事だと知った」という声も多くありました。



(2) 生活面

- ・サマースクール期間中には、中学生と大学生がコミュニケーションをとる時間も意図的に多くとりましたが、「大学生との話が楽しかった」や「質問ワークショップが楽しかった」という意見はほとんどの中学生が述べていました。普段は接することの少ない大学生と話ができることが中学生にとっては印象に残ったようです。大学生とコミュニケーションをとる時間を多くとったことで、サマースクール全体を通していい雰囲気が醸成され、国語の勉強にも集中して取り組むことができたように思います。

3.全体総括・まとめ

- ・「またサマースクールを開催してほしい」や「他の教科も教えてほしい」「楽しかったのでこれからも大学生にきてほしい」など、次回開催を望む声も多数寄せられました。大学生スタッフの間でも「楽しかったのでまたやりたい」や「今後のフォローアップもしっかりやりたい」という意見もあったので、今後も中学生に関わっていければと考えています。



(3) 総評

- ・全体を通じてサマースクールに対する印象はよく、国語に向き合う姿勢を獲得するだけでなく、大学生とのコミュニケーションによって大きな刺激を得た中学生が多くいました。参加者の声を見るに、サマースクールの目標は達成されたと考えています。
- ・サマースクールが終わった後に講師へ連絡をしてくる生徒もいました。生徒にとって学びとふれあいのいい機会を提供できたと確信しています。



3.全体総括・まとめ

大学生スタッフの感想

亀岡恭昂（東京大学 教育学研究科）



今回のみとよ未来創造塾は、学びに向かう態度を育むことを第一の目的として設計した。生徒が主体的に学びに向かえるようになりさえすれば、たった1回のサマースクールでも、効果が持続し、インパクトが大きくなる。実際に、1日目は真っ白な答案用紙を目の前にして茫然としていた子どもたちも、3日目の実力テストでは文章の読み取りから答案の作成に至るまで、自分なりにサマースクールで会得したコツを手がかりにしながら主体的に取り組んでいた。この調子で学び続ければ、3年後には素晴らしい成長を遂げているだろうと思うと、楽しみで仕方がない。サマースクールの終わりは、子どもたちが自分の足で立って歩き始めるスタート地点だと思う。今後もしもできるだけ子どもたちの成長に貢献していきたいと、心から思う。



小玉祥平（東京大学 教養学部卒）



勉強において（人生においてもだが）もっとも大事なことは、疑問を持ち、手を挙げて声を発していくことだと思う。どんな職業に就くにしても、そういった姿勢を基に、自分にも他人にも環境にも変化を起こせるようになることが、生きることを楽しむコツだと思っている。しかしそれは、言語として覚えて身に付けるものではなく、体で感じて見に染み込ませていくものである。今回のサマースクールが、生徒たちのそうした体感の小さな一歩になっていたらとても嬉しい。その意味で、2日目以降、講師やコンテンツの粗を突くような質問が投げかけられていた時には、思わず涙しそうになった。次回は、お互い成長して、一つも二つもより高い水準の知的なぶつかり合いをしたいと思っている。



3.全体総括・まとめ

谷口祐人（慶應義塾大学 政策・メディア研究科）



今回のサマースクールでは中学生の国語力を向上するという目的を掲げて、どのように国語に向き合えばいいのか、あるいは勉強に向き合えばいいのかという点を意識して取り組んだ。国語の得意な子もいれば苦手な子もあり、参加者の属性は多様であった。1日目は戸惑っており、何を書いていいかわからない、あるいは書いていても自信がないようにしていた生徒が多くいたと思う。しかし、2日目からは答案の書き方にも慣れてきたようで自信をもって答案を書く生徒が増えたように思う。3日目の実力テストでは、今まで学んだことを活用しながら難問に向き合い、優れた答案を書いた生徒が多くいた。全体を通して問題のレベルは高く設定しており、中学1年生には解けないかもしれないと考えていたが、いい意味で期待を裏切られたとともに中学1年生のポテンシャルの高さを知った。



若林正晃（東京大学 教育学研究科）



今回のサマースクールでは1人のスタッフとして、国語という科目を通して、生徒たちが自ら持続的に学んでいく態度と実際に学習を円滑に進めるスキルを同時に育てることを目的としていた。それは、持続的な学習には、「学びたいという思いが芽生えた際に実際に上手く学ぶことができた」という経験に基づくという自信が必要だと考えるからだ。

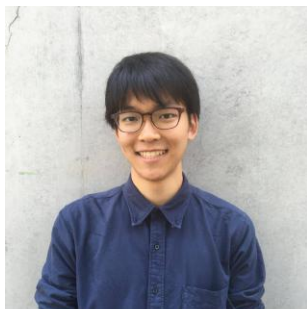
具体的には、3日間で扱った文章題や作文を通して、体感的に成長を実感してもらえるよう、考える生徒のサポートに徹した。最初は難しそうな顔をしていた生徒達だが、日を追うごとに意欲的な姿勢が見えるようになり、記述の質も向上してきた。その顔には、自信の片鱗なのか、好奇心が芽生えたのか、学習者の「楽しそうな顔」があり、非常に感慨深かった。

今後、彼らが自ら学んでいく中でさらに面白さを見出し、主体的に歩んでくれることを切に願うばかりである。



3.全体総括・まとめ

小坂真琴（東京大学 教養学部）



初めてサマースクールのスタッフとして活動したが、自分自身学ぶところが多くあった。まず、国語という教科の特殊性。恐らくはそれまでの読書量などによって、同じ学年でもかなり文章を読み書きする力に差があった。そして「好きなものと好きな人は混ざる」ということ。やはり自分自身が中学生と仲良くなれば、その中学生はかなりこちらの言っていることを聞いてくれる。その信頼関係の上

で、国語の面白さを語ったりポイントを伝授したりすることが肝要であることを実感した。今回は、多くの子が素直に注意やアドバイスを受け入れてくれて、1日目から3日目でパフォーマンスがかなり良くなったのは純粋にそばで見ていて嬉しかった。彼らに再び会えることを楽しみにしている。



成瀬有莉（上智大学 経済学部）



私自身、教科としての国語を中学生に教えるという経験は今回のサマースクールが初めてであったので、とても貴重な3日間を過ごすことができた。1日目にはどうすれば良いかわからず手が止まったり、質問をする生徒が多かったが、日が経つにつれてその数も少なくなっていく様子が個人差はあれども見て取れたことが嬉しかった。また、問題に向かう姿勢という側面においては、初めは空欄を埋めることで満足しがちなことが多かったが、全員が段々と「筆者」や「作問

者」を意識しながら問題に向かうようになり、生徒自身が授業の場を楽しんでいると感じられた。

今回は少人数制だったため、それぞれの生徒の特性に合わせて向き合うことができたことが個人的に嬉しかった。生徒の成長や表情の変化に間近で感じられたことで、さらなる彼らの成長を見守りたいと感じた。

